

看護学生の男性助産士導入に関する意識調査

高塚 麻由, 垣内 志保, 高橋 初美, 村山ヒサエ

新潟県立看護短期大学

Survey on Student Nurse Awareness of Male Midwives

Mayu TAKATSUKA, Shiho KAKIUCHI, Hatsumi TAKAHASHI, Hisae MURAYAMA

Niigata College of Nursing

Summary This study was conducted to clarify the awareness of students specializing in nursing about male midwives and to determine the tendencies stratified by academic year and subject specialty. The return rate of questionnaire replies was 87% (n=282). The subjects of the survey consisted of 1st to 3rd year nursing students, postgraduate nursing students specializing in public health (hereafter abbreviated to public health specialists) and postgraduate students specializing in midwifery (hereafter abbreviated to midwives). The results obtained were as follows.

- 1) Some 75.5% of the students were aware of the existence of male midwives.
- 2) The proportion of responses approving of the introduction of males into the midwifery field was 41.8%, while that of disapproving responses was 47.9% and that of undecided responses was 10.3%.
- 3) The reasons cited for disapproval included “mental anguish,” “lack of physical privacy,” and also the “desire to receive the anxiety-free care provided by a female midwife.”
- 4) The reasons cited for approval included “the right to choose a career,” “sex discrimination,” “sexual equality,” “new activity arising from the emergence of male midwives,” and “anticipation of paternal support of childcare.”
- 5) There was not a single student who gave the response of “would select a male midwife” when answering a hypothetical question relating to their personal choice of care provider.

要 約 本研究は、助産士導入に関して看護学を専攻する学生の意識を明らかにすること、また各学年および各専攻科の学生がどのような傾向を持っているのかを明らかにすることである。アンケート回収率は、87% (n=282) で、対象者は、看護学科の1年生から3年生、専攻科地域看護学専攻（以下、地域専攻）の学生、専攻科助産学専攻（以下、助産専攻）の学生であった。

その結果、以下のことが明らかになった。

1. 男性助産士について75.5%の学生が知っていた。
2. 助産士導入の賛否は、「賛成群」41.8%、「反対群」47.9%、「わからない」10.3%であった。
3. 反対の理由は、「精神的な苦痛を受ける」ことや「身体的プライバシーが守られない」ということ、また「同性であるということからの安心感のあるケアを受けたい」ということであった。
4. 賛成の理由としては、「職業選択の権利」や「性差別」、「男女平等に関すること」、また「助産士の登場による新しい活動」や「父親、育児へのサポートに期待する」ものであった。
5. 学生は自分をケアの受け手と想定した場合に「男性の助産士」を希望するものはひとりもいなかった。

Key words 助産士 (male midwife), 看護学生 (student nurse)
男女平等 (sexual equality), 性別役割 (sex role)
性差別 (sex discrimination)

I. はじめに

男性助産士について海外の状況をみると、英国では1960年代から、男性が助産婦になれないのは「男女平等に反する」という疑問の声が看護界から出された。受入れの是非を検討した結果、賛成・反対派の妥協点で合意に至り、1975年、性差別禁止法改正によって、助産婦法の男性参入不可の壁は撤廃された。米国ではアメリカ看護協会の「法的な性差別撤廃に照らし合わせると男性を助産職から排除することは、逆行することである」という点で、1982年に男性助産士が誕生している。現在、助産士が誕生し、英国では30年近くになるが、1997年の時点で全助産婦数の1.6% (53人)、米国では1998年の時点で1% (約60人) の助産士が活躍している¹⁾。

わが国では「助産婦職への男性への対象拡大」に関して、1988年よりさまざまな検討がなされてきている。日本看護協会は男女雇用機会均等法、教育の機会均等の理由から男性助産士導入を推進している。現在も結論は出ていないが、当初、男性助産士導入について、信頼関係、羞恥心、職業倫理の点から時機尚早²⁾として反対の姿勢をとっていた日本助産婦会が、2000年3月に「必要な社会状況変化に応じた助産婦の役割の拡大への対応」として、「妊産婦が助産婦の性別を選択する権利の保障」を盛り込み、事実上「賛成」の立場となっているが法改正には至っていない。

今回、母性看護学実習中の3年生が助産士問題に関心を持ち、「産科における助産士の役割について」のテーマカンファレンスを行うなど、この問題にさまざまな視点から取り組んだ。妊娠、出産をどのように迎えるかを考えることは、学生にとっても、近い将来の出来事であり、主体的にのぞむ姿勢は出産にとって重要である。そこで、学生が実際にケアを受ける立場を含め、この問題について洞察できることを目的とし、同じ看護職の中でも性差別のある助産婦職についてどう考えるか、また、近い将来、妊娠、出産を迎えるものの意識としてはどう考えるかを明らかにすることとした。

II. 調査対象及び調査方法

1. 調査対象と母性看護に関わる学習背景

新潟県立看護短期大学看護学科1～3年生、地域専攻、助産専攻の全学生366人中、配布可能であった323人を対象にアンケート調査し、282名(87%)より

り回答を得た。(表1)

表1 研究対象者の基本属性

性別	女性	274人		
	男性	8人		
内訳			女性	男性
	1年生		87人	3人
	2年生		94人	4人
	3年生		46人	1人
	地域専攻		35人	0人
	助産専攻		12人	0人

また、各学習背景について、1年生は後期に母性看護学概論を行うためアンケート実施時には母性看護についての講義は受けていない。2年生は前期に母性保健、3年生は前期に母性看護学実習を行っている。また、地域専攻は前期に地域母子保健学Ⅰ、Ⅱ、Ⅳが行われ、助産専攻は前期に助産学実習、臨床助産学、助産診断技術学、乳幼児保健学など母子に関する講義が行われている。

2. 調査方法

アンケートは自記式回答とした。男性助産士導入に関する賛否について「賛成(必要)」「どちらかといえば賛成(必要)」「どちらかといえば反対(不必要)」「反対(不必要)」「わからない」の5段階とし、各理由については「賛成(必要)」「どちらかといえば賛成(必要)」を「賛成(必要)群」、「どちらかといえば反対(不必要)」「反対(不必要)」を「反対(不必要)群」とし、集計した。また理由の分類については、山崎³⁾の「助産士」論の論理分析を基準とし選択肢を作成し集計した。(表2) また、調査項目については単純集計し傾向をみた。

3. 調査内容

1) 助産士導入についての認識度、2) 助産士導入の賛否、3) その賛否の理由、4) 男性が助産士としてケアを提供することへの賛否、5) その賛否の理由、6) 助産業務への男性助産士の必要性、7) その理由、8) 自分をケアの受け手と想定した場合の担当選択、9) その選択の理由、以上9項目である。

4. 調査期間

平成13年4月～7月

表 2 山崎氏の論理分析をもとに作成した理由についての選択項目

—賛成—

【男女平等論】

- ・男女雇用機会均等法があるから
- ・病院にいる医療従事者で助産婦以外は男女に資格が与えられているから
- ・男性というだけでなりたい職業になれないのは不平等だ
- ・なりたい人の権利を尊重すべきだ
- ・男性差別につながるから
- ・自分もなりたいと考えているから
- ・女性ができ、男性にはできない職業があるのは変だ

【性別役割論】

- ・知識と技術があれば性別は問わない
- ・父親へのサポートに期待ができる
- ・出産や育児に男性も参加してきているから
- ・男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから
- ・男性であっても専門家であるから
- ・出産は女性だけの仕事ではないから助産婦も女性だけの仕事ではない
- ・女性以上に頼れるところもあると思う
- ・男性の育児参加が促進される

【就業仮定論】

- ・これからは妊産婦が選んでいくから
- ・話だけではなく、導入すべきだ

—反対—

【男女平等論】

- ・男性産科医がいても、助産婦のほうがより身体へのケアが多いから
- ・女性助産婦の居場所がなくなる恐れがあるから
- ・助産婦が対象とするのは、妊産婦で女性が主だから

【性別役割論】

- ・身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる
- ・異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから
- ・男性は妊産婦の気持ちを理解できないと思う
- ・信頼関係を築くのに時間がかかる
- ・妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから
- ・同性だからこそ打ち明けられる話ができる
- ・出産に際しては、深い信頼関係が重要となるため
- ・出産は女性だけの神秘的な体験で、昔から女性の手伝ってきたから

- ・ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない
- ・直接身体ケアを受ける女性の人権が守られない恐れがある

【就業仮定論】

- ・まだまだ、医師や助産婦を選択できる環境にないから

Ⅲ. 結 果

1. 助産士導入についての認識度

1) 全学生の認識度

全学生の結果は、「知っている」213人(75.5%), 「知らない」69人(24.5%)であった。(図1)

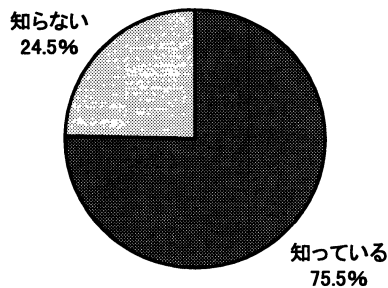


図1 助産士導入についての全学生の認識度 (n=282)

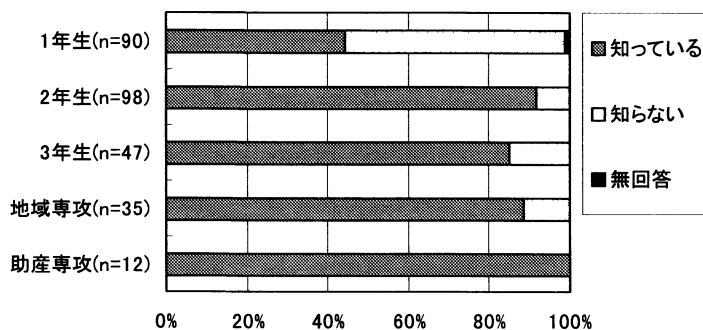


図2 助産士導入についての各学年別の認識度

2) 各学年、各専攻科別の認識度

「知っている」割合の多い順に、助産専攻 12人(100%), 2年生 90人(91.8%), 地域専攻 31人(88.6%), 3年生 40人(85.1%), 1年生 40人(44.4%)であった。「知らない」と答えたのは1年生 49人(54.4%)であった。(図2)

2. 助産士導入の賛否

1) 全学生の結果

割合の多い順に、「どちらかといえば反対」103人(36.6%), 「どちらかといえば賛成」81人(28.7%), 「賛成」37人(13.1%), 「反対」32人(11.3%), 「わからない」29人(10.3%)であった。(図3)

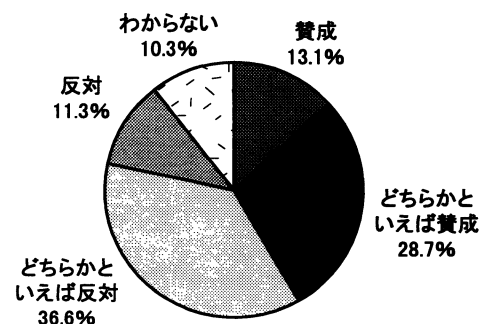


図3 助産士導入についての全学生の賛否について (n=282)

2) 各学年、各専攻科別の賛否

割合の多い順に、「賛成群」は助産専攻 9 人 (75.0%), 3 年生 22 人 (46.8%), 2 年生 42 人 (42.9%), 地域専攻 13 人 (37.1%), 1 年生 32 人 (35.6%) であった。

「反対群」は、1 年生 49 人 (54.4%), 地域専攻 18 人 (51.4%), 2 年生 46 人 (46.9%), 3 年生 20 人 (42.6%), 助産専攻 2 人 (16.7%) であった。

「わからない」では、地域専攻 4 人 (11.4%), 3 年生 5 人 (10.6%), 2 年生 10 人 (10.2%), 1 年生 9 人 (10.0%), 助産専攻 1 人 (8.3%) であった。(図 4)

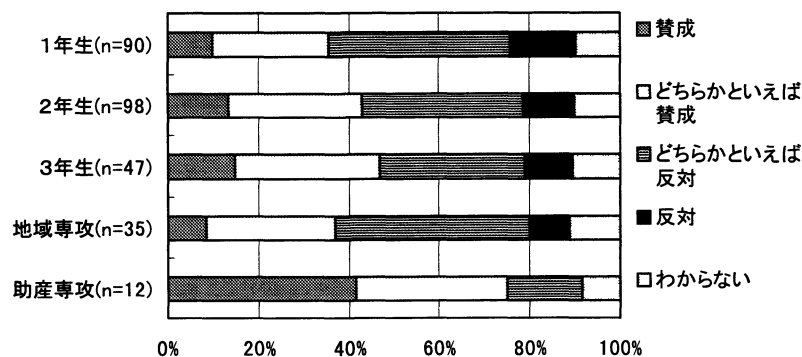


図 4 助産士導入についての各学年別の賛否について

表 3 助産士導入について資格を与えることに「賛成」の理由を各学年別に上位 5 位まで

学 年	内 容	人数
1 年生 (n=32)	男性というだけでなりたい職業になれないのは不平等だ	13人
	なりたい人の権利を尊重すべきだ	10人
	知識と技術があれば性別は問わない	9人
	男性差別につながるから	8人
	男性の育児参加が促進される	8人
2 年生 (n=42)	なりたい人の権利を尊重すべきだ	17人
	男性というだけでなりたい職業になれないのは不平等だ	15人
	男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから	12人
	男性であっても専門家であるから	11人
	男性の育児参加が促進される	11人
3 年生 (n=22)	男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから	10人
	男性であっても専門家であるから	9人
	父親へのサポートに期待ができる	8人
	なりたい人の権利を尊重すべきだ	6人
	病院にいる医療従事者で助産婦以外は男女に資格を与えられているから	5人
地域専攻 (n=13)	男性というだけでなりたい職業になれないのは不平等だ	5人
	男性であっても専門家であるから	6人
	これからは妊産婦が選んでいくから	5人
	男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから	4人
	男性というだけでなりたい職業になれないのは不平等だ	4人
助産専攻 (n=9)	男性の育児参加が促進される	4人
	父親へのサポートに期待ができる	4人
	男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから	6人
	父親へのサポートに期待ができる	6人
	男性の育児参加が促進される	4人
	男性というだけでなりたい職業になれないのは不平等だ	2人
	男性であっても専門家であるから	2人
	女性以上に頼れるところもあると思う	2人
	出産や育児に男性も参加してきているから	2人

(複数回答, 上位5位まで)

3. その賛否の理由

1) 全学生の結果

全学生では「賛成群」118 人 (41.8%) で、理由の 1 位は「男性というだけでなりたい職業になれないのは不平等だ」39 人 (33.1%), 2 位「男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから」37 人 (31.4%), 3 位「男性であっても専門家であるから」34 人 (28.8%) であった。

「反対群」135 人 (47.9%) の 1 位は「ケアを受ける女性の性的プライバシーが守られない」64 人 (47.4%), 2 位「同性だからこそ打ち明けられる話ができる」61 人 (45.2%), 3 位「妊娠から出産まで同じ女性の方が安心できるから」58 人 (43.0%) であった。

2) 各学年、各専攻科別の賛否の理由

「賛成群」の 1 年生は「男女平等」, 2 年生「なりたい人の権利」, 3 年生, 助産専攻「男性の登場での新しい活動への期待」, 地域専攻「性別より専門職である」が多かった。

(表 3)

「反対群」は 1 年生, 2 年生は「同じ女性の方が安心できる」, 3 年生, 助産専攻「性的なプライバシーが守れない」, 地域専攻「身体的ケアが多く精神的に苦痛である」が多かった。(表 4)

4. 男性が助産士としてケアを提供することへの賛否

1) 全学生の結果

割合の多い順に、「どちらかといえば反対」120 人 (42.5%), 「どちらかといえば賛成」69 人 (24.4%), 「反対」36 人 (12.8%), 「わからない」29 人 (10.3%), 「賛成」23 人 (8.2%) であった。(図 5)

表4 助産士導入について資格を与えることに「反対」の理由を各学年別に上位5位まで

学 年	内 容	人数
1年生 (n=49)	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	27人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	24人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	22人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	16人
	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	13人
2年生 (n=46)	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	26人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	24人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	23人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	21人
	助産婦が対象とするのは、妊娠婦で女性が主だから	7人
3年生 (n=20)	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	9人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	8人
	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	8人
	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	7人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	5人
地域専攻 (n=18)	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	9人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	8人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	7人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	5人
	信頼関係を築くのに時間がかかる	4人
助産専攻 (n=2)	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	2人
	男性は妊娠婦の気持ちを理解できないと思う	1人
	信頼関係を築くのに時間がかかる	1人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	1人
	直接身体のケアを受ける女性の人権が守られない恐れがある	1人

(複数回答, 上位5位まで)

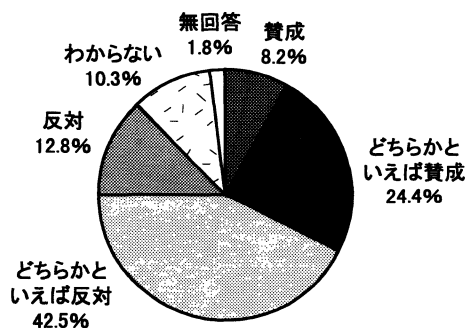


図5 男性がケアを提供することへの全学生の賛否 (n=282)

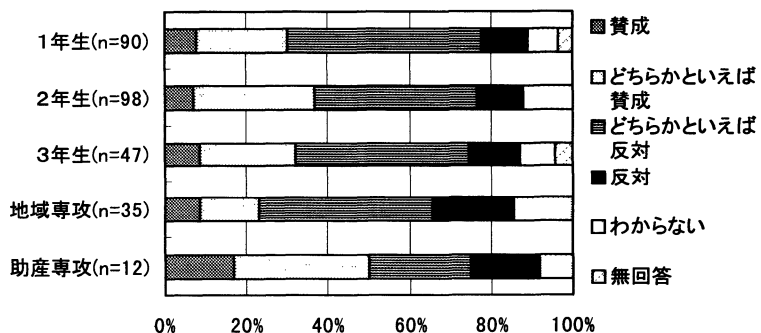


図6 男性がケアを提供することへの学年別の賛否

2) 各学年, 各専攻科別の賛否

割合の多い順に「賛成」では, 助産専攻 6 人 (50.0%), 2 年生 36 人 (36.7%), 3 年生 15 人 (31.9%) 1 年生 27 人 (30.0%), 地域専攻 8 人 (22.9%) であった。

「反対」は, 1 年生 53 人 (58.9%), 3 年生 26 人 (55.3%), 2 年生 50 人 (51.0%), 地域専攻 22 人 (48.9%), 助産専攻 5 人 (41.7%) であった。

「わからない」では, 地域専攻 5 人 (14.3%), 2 年生 12 人 (12.2%), 3 年生 4 人 (8.5%), 助産専攻 1 人 (8.3%) 1 年生 7 人 (7.8%) であった。(図 6)

5. その賛否の理由

1) 全学生の結果

全学生では「賛成」92 人 (33.2%) で, 理由の 1 位は「父親へのサポートに期待が出来る」33 人 (35.9%), 2 位「男性の育児参加が促進されるから」30 人 (32.6%), 3 位「男性であっても専門家であるから」「女性以上に頼れるところもあると思う」21 人 (22.8%) であった。

「反対」156 人 (56.3%) では, 1 位「同性だからこそ打ち明けられる話が出る」72 人 (46.2%), 2 位「ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守られない」65 人 (41.7%), 3 位「妊娠から出産まで

表5 男性がケアを提供することについて「賛成」の理由を各学年別に上位5位まで

学 年	内 容	人数
1年生 (n=10)	男性の育児参加が促進される	10人
	父親へのサポートに期待ができる	10人
	女性以上に頼れるところもあると思う	6人
	知識と技術があれば性別は問わない	6人
	出産や育児に男性も参加してきているから	6人
2年生 (n=36)	男性であっても専門家であるから	12人
	男性の育児参加が促進される	11人
	父親へのサポートに期待ができる	11人
	知識と技術があれば性別は問わない	10人
	男性というだけでなりた職業になれないのは不平等だ	9人
3年生 (n=15)	父親へのサポートに期待ができる	7人
	女性以上に頼れるところもあると思う	5人
	出産や育児に男性も参加してきているから	5人
	男性の育児参加が促進される	4人
	男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから	3人
地域専攻 (n=8)	男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから	3人
	男性の育児参加が促進される	3人
	父親へのサポートに期待ができる	3人
	知識と技術があれば性別は問わない	2人
	出産や育児に男性も参加してきているから	2人
助産専攻 (n=6)	男性であっても専門家であるから	3人
	男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから	2人
	男性というだけでなりた職業になれないのは不平等だ	2人
	女性以上に頼れるところもあると思う	2人
	男性の育児参加が促進される	2人
	父親へのサポートに期待ができる	2人

(複数回答, 上位5位まで)

表6 男性がケアを提供することについて「反対」の理由を各学年別に上位5位まで

学 年	内 容	人数
1年生 (n=53)	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	28人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	26人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	23人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	19人
	信頼関係を築くのに時間がかかる	14人
2年生 (n=50)	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	14人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	29人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	21人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	18人
	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	17人
3年生 (n=26)	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	14人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	15人
	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	13人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	10人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	9人
地域専攻 (n=22)	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	8人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	10人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	8人
	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	8人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	7人
助産専攻 (n=5)	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	6人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	4人
	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	3人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	2人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	2人
	信頼関係を築くのに時間がかかる	1人
	男性産科医がいても、助産婦のほうがより身体へのケアが多いから	1人

(複数回答, 上位5位まで)

同じ女性のほうが安心できるから」64人(41.2%)であった。

2) 各学年, 各専攻科別の理由

「賛成群」では1年生, 3年生と地域専攻「育児参加への期待」, 2年生, 助産専攻「性別より専門職である」が多かった。(表5)

「反対群」をみると1年生は「女性で安心できる」, 2年生, 助産専攻「同性だから打ち明けられる」, 3年生「性的プライバシーが守れない」, 地域専攻「身体的なケアが多く精神的な苦痛を感じる」が多かった。(表6)

6. 助産業務への男性助産士の必要性

1) 全学生の結果

割合の多い順に、「どちらかといえば不必要」88人(31.2%), 「どちらかといえば必要」72人(25.5%), 「わからない」67人(23.7%), 「不必要」29人(10.3%), 「必要」23人(8.2%)であった。(図7)

2) 各学年, 各専攻科別の必要性

割合の多い順に「必要群」では, 助産専攻5人(41.7%), 2年生39人(39.8%), 3年生16人(34.0%), 1年生27人(30.0%), 地域専攻8人(22.9%)であった。

「不必要群」は, 1年生42人(46.7%), 地域専攻15人(42.9%), 2年生39人(39.8%), 3年生18人(38.3%), 助産専攻3人(25.0%)であった。

「わからない」では, 助産専攻4人(33.3%), 地域専攻11人(31.4%), 3年生12人(25.5%), 1年生20人(22.2%), 2年生20人(20.4%)であった。(図8)

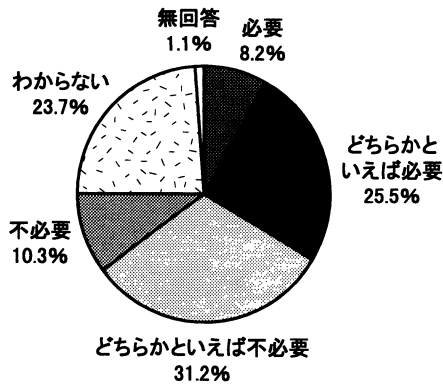


図7 助産業務への男性の必要性について（全学生）(n=282)

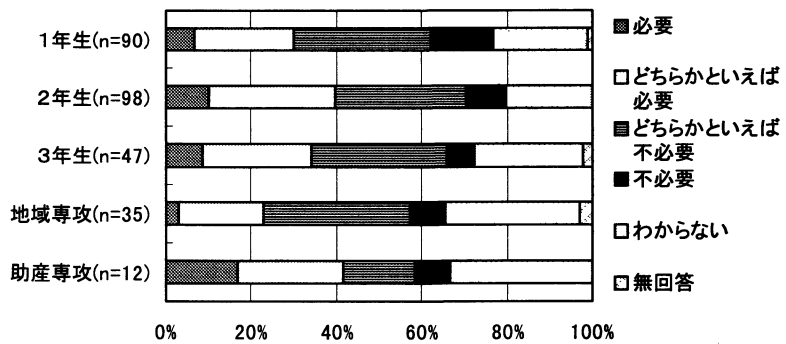


図8 助産業務への男性の必要性について（各学年別）

7. その理由

1) 全学生の結果

全学生では「必要群」95人（34.3%）で、理由の1位は「父親へのサポートに期待ができる」44人（46.3%）、2位「男性の育児参加が促進される」34人（35.8%）、3位「男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから」31人（32.6%）であった。

「不必要群」117人（41.9%）

では、1位「同性だからこそ打ち明けられる話ができる」50人（42.7%）、2位「妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから」44人（37.6%）、3位「ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない」43人（36.8%）であった。

2) 各学年、各専攻科の理由

「必要群」の理由は、各学年とも、男性が登場することで「育児参加」や「父親へのサポート」など、「新しい活動に期待する」であった。（表7）

「不必要群」では、1年生で「同性だから安心できる」というものが多く、2年生、地域専攻「同性であるから打ち明けられる」、助産専攻「性的なプライバシーが守れない」、3年生ではこれらと、「女性の人権が守れない」というものが多かった。（表8）

8. 自分をケアの受け手と想定した場合の担当選択

1) 全学生の結果

学生に、自分またはパートナーが妊娠、出産すると想定した場合、「女性の助産婦」、「男性の助産士」、「どちらでもよい」のいずれを選択するかで、全学生の結果は、「女性の助産婦」254人（90.1%）、「どちらでもよい」28人（9.9%）であり、「男性の助産士」を選択したものはいなかった。（図9）

表7 助産業務に男性は「必要」とした理由の上位5位まで

学 年	内 容	人数
1年生 (n=27)	男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから	11人
	男性の育児参加が促進される	11人
	父親へのサポートに期待ができる	9人
	女性以上に頼れるところもあると思う	7人
	知識と技術があれば性別は問わない	7人
2年生 (n=39)	父親へのサポートに期待ができる	18人
	男性の育児参加が促進される	14人
	男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから	12人
	出産や育児に男性も参加してきているから	12人
	女性以上に頼れるところもあると思う	10人
3年生 (n=16)	父親へのサポートに期待ができる	9人
	男性の育児参加が促進される	5人
	出産や育児に男性も参加してきているから	5人
	女性以上に頼れるところもあると思う	4人
	男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから	3人
	男性であっても専門家であるから	3人
	知識と技術があれば性別は問わない	3人
地域専攻 (n=8)	父親へのサポートに期待ができる	4人
	出産は女性だけの仕事ではないから助産婦も女性だけの仕事ではない	3人
	知識と技術があれば性別は問わない	3人
	出産や育児に男性も参加してきているから	3人
	男性の育児参加が促進される	2人
助産専攻 (n=5)	男性の登場で新しい視点での助産婦活動が期待されるから	4人
	父親へのサポートに期待ができる	4人
	男性の育児参加が促進される	2人
	男性というだけでなりた職業になれないのは不平等だ	1人
	男性であっても専門家であるから	1人
	女性以上に頼れるところもあると思う	1人
	出産や育児に男性も参加してきているから	1人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	1人
		1人

（複数回答、上位5位まで）

表8 助産業務に男性は「不必要」とした理由の上位5位まで

学 年	内 容	人数
1年生 (n=42)	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	21人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	20人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	18人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	16人
	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	12人
2年生 (n=39)	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	20人
	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	13人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	13人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	10人
	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	9人
3年生 (n=18)	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	7人
	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	7人
	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	7人
	直接身体のケアを受ける女性の人権が守られない恐れがある	7人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	6人
地域専攻 (n=15)	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	7人
	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	6人
	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	6人
	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	3人
	直接身体のケアを受ける女性の人権が守られない恐れがある	3人
助産専攻 (n=3)	ケアを受ける女性の性的なプライバシーが守れない	3人
	異性では身体的、精神的な面での細やかな相談が十分できないから	1人
	信頼関係を築くのに時間がかかる	1人
	妊娠から出産まで同じ女性のほうが安心できるから	1人
	同性だからこそ打ち明けられる話ができる	1人
	身体的なケアが多く、精神的な苦痛を感じる	1人
	直接身体のケアを受ける女性の人権が守られない恐れがある	1人

(複数回答, 上位5位まで)

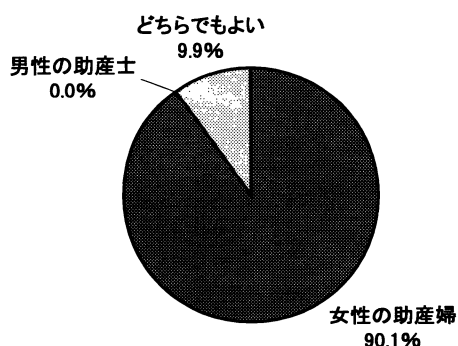


図9 自分をケアの受益者と想定した場合の担当選択について(全学生)

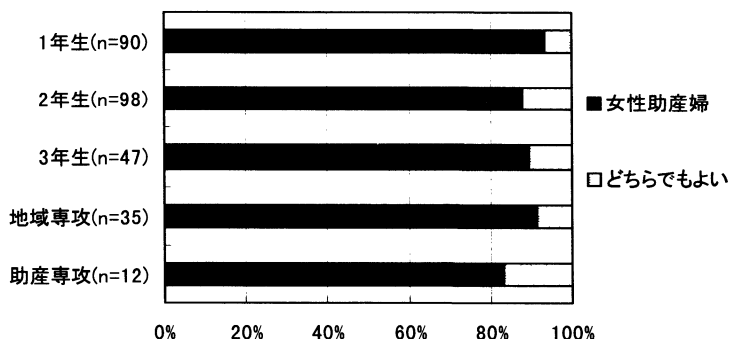


図10 自分をケアの受益者と想定した場合の担当選択について(各学年別)

2) 各学年, 各専攻科別の結果

「女性の助産婦」を選択した割合の多い順に, 1年生 84 人 (93.3%), 地域専攻 32 人 (91.4%), 3年生 42 人 (89.4%), 2年生 86 人 (87.8%), 助産専攻 10 人 (83.3%) であった。(図10)

9. その選択の理由

1) 全学生の結果

全学生の結果は, 「女性の助産婦」選択で, 1位「異性にケアされるのは抵抗を感じる」154 人 (60.6%), 2位「同性でリラックスできる」128 人 (50.3%), 3

位「羞恥心への配慮を満たしてくれるから」126 人 (49.6%) であった。

「どちらでもよい」では, 1位「専門家だから性別は関係ない」19 人 (67.9%), 2位「性別より知識, 技術を重視する」18 人 (64.3%), 3位「父親へのサポートに期待できる」15 人 (53.6%) であった。

2) 各学年, 各専攻科別の理由

「女性の助産婦」を選択した理由は, 各学年とも「羞恥心を感じる」, 「抵抗を感じる」が多かった。(表9)

また, 「どちらでもよい」では, 「性別より専門職

である」,「父親へのサポートを期待する」であった。
(表 10)

表 9 担当に「女性の助産婦」を選択した理由の上位 6 位まで

学 年	内 容	人数
1年生 (n=84)	異性にケアされるのは抵抗を感じる	49人
	同性でリラックスできる	47人
	安心できる	42人
	羞恥心への配慮を満たしてくれるから	39人
	同性にケアしてもらいたい	29人
	共感してもらえる	20人
2年生 (n=86)	異性にケアされるのは抵抗を感じる	50人
	羞恥心への配慮を満たしてくれるから	44人
	安心できる	42人
	同性でリラックスできる	42人
	共感してもらえる	33人
	同性にケアしてもらいたい	31人
3年生 (n=42)	異性にケアされるのは抵抗を感じる	24人
	羞恥心への配慮を満たしてくれるから	23人
	同性にケアしてもらいたい	20人
	安心できる	17人
	共感してもらえる	16人
	同性でリラックスできる	14人
地域専攻 (n=32)	異性にケアされるのは抵抗を感じる	25人
	同性でリラックスできる	20人
	同性にケアしてもらいたい	16人
	羞恥心への配慮を満たしてくれるから	13人
	安心できる	12人
	共感してもらえる	7人
助産専攻 (n=10)	羞恥心への配慮を満たしてくれるから	7人
	異性にケアされるのは抵抗を感じる	6人
	同性でリラックスできる	5人
	同性にケアしてもらいたい	5人
	安心できる	2人
	共感してもらえる	2人

(複数回答, 上位6位まで)

表10 担当を「どちらでもよい」とした理由の上位 3 位まで

学 年	内 容	人数
1年生 (n=6)	性別より知識、技術を重視する	6人
	専門家だから性別は関係ない	5人
	父親へのサポートに期待できる	2人
2年生 (n=12)	父親へのサポートに期待できる	7人
	専門家だから性別は関係ない	6人
	性別より知識、技術を重視する	6人
3年生 (n=5)	専門家だから性別は関係ない	4人
	父親へのサポートに期待できる	4人
	性別より知識、技術を重視する	3人
地域専攻 (n=3)	専門家だから性別は関係ない	2人
	性別より知識、技術を重視する	1人
	どんどん活躍してもらいたい	1人
助産専攻 (n=2)	性別より知識、技術を重視する	2人
	専門家だから性別は関係ない	2人
	優しく接してくれると思う	1人

(複数回答, 上位3位まで)

IV. 考 察

わが国では、助産士導入に関して 1988 年よりさまざまな検討がなされ、助産士に関連した研究や特集

が組まれてきた。1996 年をピークとし研究件数は減ってきてはいるものの、現在も導入の是非について、専門職以外の妊産婦やその夫、一般人を対象とした調査が行われている。中でも多くみられるのは、保健指導や乳房ケア、新生児ケアなど具体的な助産業務に対する意識を問うもので、そこでは直接身体に触れる援助内容に関して否定的な結果となっている。兼宗ら⁴⁾の看護学生同士における、助産士導入に関するディベート授業前後での意識調査したものがある。ディベート前に比べ賛成者は増加し、その賛成理由は「性差別」が増加している。導入反対の理由の半数は「羞恥心」であった。

今回、本学学生における助産士に関する意識調査で明らかとなったのは、資格を与えることに「反対」47.9%、「賛成」41.8%で「反対」が多かった。学年別では、助産専攻はおおむね「賛成」を示し、他の学年は「反対」が多かった。ケアを提供することについての「反対」は55.4%に増え、「賛成」は32.7%に減っている。兼宗らと同様直接身体に関わるケアにおいては「反対」の傾向となった。必要性については各学年とも2割以上が「わからない」とし、「必要」としたものは半数以下であった。以下、これらについて考察する。

1. 男性助産士導入に「反対」の理由について

本調査では男性助産士に関して「反対」の理由で多いものは、「羞恥心への配慮」や「身体的ケアでの精神的苦痛」があがった。阿部⁵⁾の妊娠・出産に関する報告からも、医療者の手が直接性器に接触する事柄について抵抗が大きいという結果である。西海ら⁶⁾の結果でも、直接性器に関わる援助項目において有意に女性の看護を望むとある。他の先行研究も同様であり、新生児ケアや保健指導といった直接性器に関わらないケアについて行ってもよいとする結果である。大出⁷⁾は、「出産とは、対面状況の中で妊産婦が足を開き身体を露出し、順調に排泄することや母乳を出すことが期待されている場」で、これは「少なくとも羞恥心を引き起こしやすい状況を内在させている」と述べている。これらのことから「反対」である理由は、性器にまつわる援助を受けることに強い羞恥心を感じ、そのため助産士導入に関して抵抗が生じると考えられる。本調査においても、母性看護学実習中の3年生は対象の羞恥心への配慮を実感することでケアの提供に関し、「反対」の理由

1 位, 2 位に「性的プライバシー」, 「身体的ケアからの精神的苦痛」をあげる要因になったのではないかと思われる。

2. 男性助産士導入に「賛成」の理由について

「賛成」理由で多いのは, 「男女平等」の立場と「新たな活動が期待される」ものであった。英国や米国での助産士導入に至る経緯をみても, 同様に性差別禁止, 男女平等の観点から男性助産士が導入されている。国内の研究や議論をみても, 日本のジェンダーロールを乗り越え性差をなくし, 男女共同参画の方向へと向かっていこうとするのが賛成派の意見となっている。今後さらに高まるであろう生殖医療, そして思春期の性教育, また出産に関しては両親学級や父親の育児参加等が, 男性助産士に期待される新たな活動として浮かんできくのだと思われる。しかし山崎³⁾は賛成派の問題点として, 「男子の資格取得を求める平等論レベルがとかく強調され, 法制度的な男女平等の議論に終始している点」「社会思想や文化論のレベルでの議論が弱い」ことを指摘している。山田⁸⁾は, 日本における身体接触は, 欧米社会に比べ, 性的意味を付与される確率が高いと日本人の身体感覚の特殊性という視点で述べている。

男性参加は, 権利意識だけでなく受け手が最大の利益を得るという視点で, 幅広い視野からこの問題に取り組む必要があろう。

3. 各学年による意識の傾向

男性助産士導入問題について, 1 年生は半数以上が「知らない」と答えた。助産は看護の中の一部であり, 看護婦を目差して入学してきたばかりの 1 年生にとっては, まだ特殊な問題であったと思われる。助産専攻は助産士導入に関して, 「賛成」が他の学年より多い傾向がみられた。助産の専門職を目差す学生たちは日頃から夫の分娩・子育て参加に積極的に取り組んでいたり, 受胎調節・家族計画, リプロダクティブ・ヘルス/ライツなど性に関して学ぶ機会も多いといった背景が影響していると思われる。

必要性について「わからない」と答えたものが多くみられたのは, この問題の難しさや, この問題に意識を持っていなかったことではないかと思われる。今後, 学生間のディベートの機会を持つなど, さまざまな視点からこの問題を取りあげ, 看護職としての考えや洞察力を深めていく必要がある。

4. ケアの受け手の立場から

今回, 学生の意識調査から見てきたものは, 「男女平等」や「性差別」など, 「人としての権利」という視点では 3 割から 5 割のものが, 助産士に「賛成」したが, 妊娠・出産にあたり実際の中でケアを受けるとなると, 異性からのケアはとてども羞恥心が強く抵抗のあるものであった。学生は, 女性の助産婦からのケアを受けたい, 妊娠から出産まで同じ女性に関わって欲しいと希望し, それらが自分にとって安心感を与えてくれる重要なものと考えていた。

ところで, 助産士が就業する視点から米国の産科看護婦の就業・勤務状況をみると, 多くの病院が産科には女性の看護婦しか雇わない現状である。この理由として病院側は, ケアの受け手である女性からのクレームが多いと経営が成り立たないとしている¹⁾。男性が産科において援助を行うことは, 非常に困難だという現状があるのも事実である。この面からみて米国では専門家であるという権利よりも受け手の選ぶ権利を優先しなければいけない事実があった。先に導入され, 助産士の活動している各国をよい先例とし学びつつ, 日本人の身体感覚の特殊性等を踏まえ, じっくりと取り組みさまざまな視点からの議論を積み重ねることが重要だと考える。

今回の結果で学生は「女性の助産婦」を選択したが, 理想とする助産婦像を ICM 国際助産婦連盟の声明文⁹⁾から引用すると, 「助産婦は女性が自分達の社会の中で出産に現実的な期待を持つよう, そしていかなる女性も少なくとも妊娠あるいは出産によって傷つけられることのないことを少なくとも期待するよう奨励する」ことであり, 助産にあたっては, 女性が大切にしている価値を重要に取り扱うことを忘れず, 妊娠・出産に際してはリラックスできる安全な環境, 誰からも自分や子どもに対して脅威を与えられないことを保障することが重要である。

V. おわりに

男女共同参画の時代, 性差による制限は問われないことが当然となる。さらに, 個人の価値観も多様化している。しかし, 男性助産士導入問題は, 羞恥心をともなう性差という問題がケアの受け手にあること, そしてそれは安心な妊娠・出産には非常に重要な要因であることから今後も慎重に検討してゆくことが課題となる。母と子, その家族が誰からも脅威をおぼえることなく, 安心して妊娠・出産・育児

にのぞめる環境を提供することが、助産婦の役割であるところの研究により再確認した。

本調査にご協力くださいました本学学生、諸先生方に心より深く感謝いたします。

VI. 文献

- 1) 加納尚美：男子への助産婦資格拡大問題に関する国際的状況からの検討，日本助産学会誌 14 (1)，72～75，2000
- 2) 伊藤隆子，近藤潤子，斉藤博人ほか：「男性助産婦」の是非を問う，助産婦雑誌 42 (12)，57～65，1988
- 3) 山崎裕二：新しい思想としての「助産士」，日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要第 6 号，60～67，1993
- 4) 兼宗美幸，渡部尚子，坂本めぐみ：看護短大生の助産士導入と助産士によるケアの受入れに関する意識，母性衛生 38 (3)，367，1997
- 5) 阿部真理子：産む側 2200 人が語る お産って何だろう，「ぐるーぷ・きりん」のアンケート報告，1999
- 6) 西海ひとみ，湯舟貞子，山崎潤子ほか：男性への助産婦資格拡大に関する意識調査，母性衛生 42 (1)，49～59，2001
- 7) 大出春江：羞恥心からみる出産という場，助産婦雑誌 50 (7)，42～47，1996
- 8) 山田昌弘：身体的コミュニケーションの実証研究，平成 6-7 年度文部省科学研究費補助金一般研究 (B) 研究成果報告書
- 9) 青木康子，加藤尚美，平澤美恵子：助産学概論，医学書院，東京，1996